

自己評価表

教育方針	幼児児童生徒に対し、一人一人の障がいの状態やニーズに応じた教育を行い、個性を伸張するとともに豊かな心を育み、将来自立し、社会参加のできる人間を育成する。	重点目標	チャレンジし続ける幼児児童生徒の育成 (知ろうとする力、伝えようとする力、やってみようとする力の育成)
------	--	------	--

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
	指導と評価の一体化 ・分かる喜びが味わえる授業実践 ・確かな学力の定着	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒がやってみたいと感じる活動内容を計画・実施するとともに、何が身に付いたかを明確にする。 目標や到達度を明確にし、幼児児童生徒の取組について分かりやすく評価するとともに、授業改善につなげる。 学習指導案にキャリア教育の観点を明記するとともに、単元の目標や指導内容を3つの柱で整理、評価規準を3観点で示し指導と評価の一体化を図る。 指導計画作成時には、各単元で具体化・明確化した目標を設定する。1時間の授業では、3観点の特に重きを置く評価規準を選び、授業で身に付けたい資質、能力を絞ることで学習内容を精選し、確かな学力が身に付くよう授業実践を重ねる。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 重点目標を念頭に置きながら、幼児児童生徒の生活上の課題を踏まえて授業を計画、実施し、次の学習につながるよう子どもの様子を共有した。 各部の卒業後の姿を見据え、個々の課題を明確にし、体験的、実地的な学習の充実や学力の定着を図るための指導を丁寧に行うことで、成長が見られた。 年間指導計画や学習指導案に3観点に基づいた目標や指導内容、評価規準及びキャリア教育の観点を明記し、身に付けさせたい力を明確化した。指導と評価の一体化を図りながら、個々の到達度を確認し、授業改善につなげるよう取り組んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒が目標を理解して取り組めるよう、具体的な言動に注目した目標や評価規準を設定し、教員間で共有するとともに評価の観点を持って指導や支援を行う。 個々の実態に応じた目標設定をするとともに、卒業後の生活を見据えた学習内容や課題を積極的に取り扱う。 幼児児童生徒が達成感を感じられる授業実践を積み上げ、知りたい、伝えたい、やってみたいという気持ちを育む。 学習指導案におけるその時間内の個人目標についての評価規準を詳細に記載し、身に付けさせたい力を意識しながら指導に当たるようにする。
P D C A サイクルによる教育課程の実施	教科横断的・系統的な指導 ・各学年及び各部の連携 ・各教科等の系統性のある学習活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握のツールを活用し、各学級で考えた個々の実態や目標を学習グループで共有する。さらに、次年度に実態把握や指導内容等を引継ぎ、系統性のある指導につなげる。 年間指導計画や個別の指導計画を活用しながら、教科の関連性、学年及び学部等の系統性のある指導を行う。 年間指導計画及び個別の指導計画において、キャリア教育や各教科等の視点を明記し、学習指導要領に基づいた学習内容や目標、評価規準(基準)を設定することで、幼児児童生徒一人一人の学習の状況を明確にする。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 系統性のある学習活動の工夫など各部の連携を図る取組を行った。年度始には新旧担任の引継ぎを実際の学習場面で行えるよう配慮し、部を超えた対応も行った。また、重複障がい学級において、日常生活の指導を毎日同じ時間に設定し、年齢に応じた生活に必要な力が身に付くよう取り組み、継続した指導を行う中で一定の成果が見られた。 中学部では作業学習を中心に指導の形態を見直し、高等部、及び、卒業後の生活につながるようにした。また、高等部の生徒が中学部の生徒に対して技能検定講座として実際の高等部の学習を体験できる時間を設定した。 学習活動の充実を図るために、指導内容研修会を設け、小グループに分かれて実態に応じた指導内容や支援の工夫、教材教具について事例等を持ち寄って研修を深めたり、情報交換を行ったりした、実態把握の共通ツールが幼児児童生徒の目標を考える指標として活用できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度同様に学年や学部間の引継ぎを丁寧に行うことで学習内容を引き継ぎ、系統性のある指導になるようにするとともに、学習活動の充実を図る。 今年度作成し定期的に見直している実態把握ツールや年間指導計画等を基に正しく実態を捉え、学習内容を精選したり、授業を計画、実施したりする。 個々の課題を明確にするとともに、学級や学習グループでの学習において、学力及び生活力が身に付くよう教科別の指導や教科等を合わせた指導を関連させながら、学習活動の充実を図る。 各教科や教科等を合わせた指導の中で、幼児児童生徒に身に付けさせたい力を育めるよう、目標設定の方法や学習内容について、小グループでの研修を実施する。
	個別の指導計画及び個別の教育支援計画の活用 ・個に応じた学習活動の充実 ・コミュニケーション活動の推進と自己表現力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 本人や保護者の願いを個別の教育支援計画に反映し、教育的ニーズや目標を明確にして個別の指導計画を立案し、必要に応じて関係者・関係機関と連携しながら適切な支援につなげる。 各課連携を図り、「何を、どのように学ぶか、何が身に付いたか」が分かる個別の指導計画の作成・活用を目指す。 学習や自己表現の充実を目指して、ICT機器の活用について研修や実践を重ね、個に応じた支援につなげる。 幼児児童生徒それぞれの状態に応じたコミュニケーションツールを用いて、コミュニケーション活動を活発に行えるよう、人的・物的環境を整え、支援する。 学級担任が中心となり自立活動の個別の指導計画を作成し、授業担当者や目標や手立てを共有し、学校生活全体を通して自立活動に取り組み、目標を達成する。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 個別の教育支援計画と個別の指導計画の関連を明確にした上で、日々の指導、支援を行うよう、学期ごとに作成する指導計画の指導目標に個別の教育支援計画の支援目標も記載するようにした。各授業の中で目標を意識して取り組むことにつながる。 学習や自己表現の充実に向けて、ICT活用レベルアップ研修の中でICT機器のフィッティングとMicrosoft365の研修を行った。理解を深めるとともに日々の授業に生かすよう取り組み始めた教職員が多く見られた。 個々のコミュニケーションに関する目標に基づいて、学習及び学校生活全体の中で機会を捉えて幼児児童生徒の発信を受け止める時間を十分に取ったり、発信につながる機器や手段を模索したりした。 学級担任が幼児児童生徒にとつての学校生活全体のコーディネーターとしての役割を果たす意識を高め、個別の指導計画を活用して授業担当者や情報を共有し、個に応じた指導の充実につながるよう取組を進めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人や保護者の願いや希望を確認するとともに、発達段階や本人の状態に応じて目標や支援内容が更新されるよう個人懇談の機会を確保する。また、更新内容について関係者と情報を共有し、学校内外で支援の充実が図れるようにする。 研修や情報交換を通して得た知識や技能を実際の場面で生かし、幼児児童生徒のあらゆる場面での自己表現や学習の充実につながるよう、事例や教材の共有化を図れるようにする。 友達や教師と関わりたい、伝えたいという気持ちが持てるような状況づくりを大切にしながら、コミュニケーションツールの獲得につながる指導、支援の充実を図る。 学級担任が中心となり、個別の指導計画の検討会を実施し、チェックシートを活用して活発な意見交換を行う。幼児児童生徒の将来像やニーズ、実態についての共通理解を図り、目標や学習内容、指導方法について十分に検討したうえで、より効果的な指導につなげる。

	<p>キャリア教育の視点を取り入れた授業実践</p> <p>・一人一人の自立と社会参加を目指すキャリア教育と自立活動の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育全体計画とキャリア形成のための発達段階確認表を踏まえ、「キャリアガイド教室の成果と今後の取組」の表を活用して、目標や支援内容を考える。実施後には、身に付けたい能力や態度が意図的・継続的に育成されているか、今後の学習にどう生かすかを話し合い、授業実践を行う。 ・指導計画を立案する際はそれぞれの実態に応じたキャリア教育の視点を踏まえながらねらいを定め、また授業実践をする際には目標達成に近づいているかフィードバックを行いながら授業を見直す。 ・キャリア形成のための発達段階別指導内容を確認表として幼児児童生徒の実態把握に活用しキャリア教育の視点を学習活動に取り入れやすくする。 ・キャリアガイド教室を全教育課程において実施できるよう計画し、幅広いキャリア発達の育成を図る。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・学期末に幼児児童生徒一人一人のキャリア形成のための発達段階確認表を見直すことで、取り組むべき観点を確認した。それに基づき、個別の指導計画や年間指導計画にキャリアの視点を記載することで学習活動の中で取り扱うことを意識して授業を実施した。 ・キャリアガイド教室では幼児児童生徒の実態や発達段階に応じた内容を選定して実施した。 ・キャリアガイド教室を年間指導計画の中に位置付け、その単元の中でキャリア教育で育成したい能力の重点項目を明確にすることで、単元全体を通してねらいを意識した学習活動を考え、実施することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発達段階確認表を活用し、幼児児童生徒のキャリア発達について把握するとともに、どのような視点が必要なのかを明確にした上で学習活動を計画する。 ・キャリア教育についての好事例や実施方法を学年、学部間で共有することで、児童生徒のキャリア発達に応じた学習内容を整理し、選定できるようにする。 ・キャリア教育で育成したい能力について、発達段階別指導内容を踏まえ確認することや卒業後に自分らしく生きるための必要な力は何かを具体的に考えることで、系統性のある指導につなげる。
安心・安全な学校づくり	<p>医療的ケアの実施体制の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・医療的ケア安全委員会や学校医等健診、指導医巡回指導などで医療的ケアに関する検討や改善を行い、医療的ケアを必要とする幼児児童生徒が安全で安心できる学習環境の整備を行う。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・医療的ケアに関する見直しを衣行い、医療的ケアの個別手順書を新規に作成し、複数チェックを行うようにした。 ・主治医による指示書の曖昧な表現や項目がなくなるよう、様式や依頼状を見直した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの取組を継続するとともに、本人、家庭、学校、医療機関、相互の関係づくりに努める。 ・書類の見直しを定期的に行いながら必要に応じて改善し、正確で適切な医療的ケアを実施する。 ・人為的ミスを目指し、手技や情報共有の複数チェックを行う体制を構築する。
	<p>食に関する指導の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・給食委員会を中心に、食に関する指導計画や食中毒、アレルギー対策等、安全に給食を実施する体制を築く。 ・給食献立表を通して、食に関する知識を広める。 ・摂食指導推進委員会が中心となり、学年等グループの教職員に基礎的な研修を行ったり、指導方法の事例検討を行ったりするなど、教職員間で学び合う機会を増やし、全教職員の摂食指導のスキルアップを図る。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・食に関する指導計画を作成するとともに、個別で摂食ファイルを作成し、給食の提供、摂食指導の適正化に取り組んだ。 ・外部専門家による摂食指導研修会などの全体研修と少人数グループで実施する研修を計画し、摂食指導の基礎的な知識の習得については一定の成果を得た。 ・個に応じた具体的な指導方法を見極め、効果的な指導を継続して実践することには課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食と摂食についての情報を一元化し、情報共有しやすくすることで、個々の食に関する指導の充実が図れるよう工夫する。 ・全体研修と少人数グループの研修を計画し、摂食指導の充実を図るとともに、基礎知識の理解を深める。 ・少人数グループの中でリーダー的な役割を果たす教員を増やし、積極的に事例検討などの実践的な研修を行い、指導力の向上を図る。
	<p>道徳教育、人権・同和教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・より人権を尊重し充実した授業実践を目指し、教職員間で授業研究などを行う機会を設け、授業改善や人権教育の日常化につなげる。 ・道徳教育全体計画に基づいて各教科等と関連付けながら、教育活動全体を通して機会を捉え道徳性を養えるようにする。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・人権・同和教育ホームルーム（学級）活動終了後、授業者が振り返りを実施することで児童生徒の課題が明確になり、主題を意識したホームルーム（学級）活動が行われるようになった。 ・道徳教育全体計画に基づいて、学校生活全体において道徳教育の視点を持って働き掛けるとともに、道徳教育の視点に基づいて成長を捉えることにも努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会や研究会等の資料を担任に情報提供することで、ホームルーム（学級）活動の充実を図る。 ・学習活動における児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を個人内評価し、記録する。それを蓄積することで、道徳性を養う視点（評価の仕方）を共有する。
	<p>危機管理の徹底及び安全教育、防災教育の実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員研修会、防災・安全学習、ショート訓練を通して、幼児児童生徒並びに教職員共に、自分の身は自分で守る力を身に付ける。 ・より一層幼児児童生徒との信頼関係づくりに努め、いじめや児童虐待の兆候に早く気付けるようにする。 ・SNSやインターネット等によるいじめを防止するために、教員や幼児児童生徒への啓発の機会を増やす。 ・幼児児童生徒が健康で安心して学べるよう、子ども療育センターと連携・連絡を密に行い、共通理解を図る。 ・子ども療育センターとの連絡会や随時の連絡を密に行い、共通理解や確認に努め教職員に周知を図る。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員研修を通して、一時避難の手順確認や不審者への対応について理解を深め、万が一の状況に備えている。 ・防災・安全学習やショート訓練において、実際には困難が予想される場合に備えて実施した。 ・児童生徒総会や教職員対象の講演会を通して、情報化社会における人権侵害についての理解を深めることができた。 ・保護者対象の救急蘇生法講習会を開催し、多数参加していただいた。 ・子ども療育センターと定期的に連絡会を実施し、諸行事や健康状態に関する情報交換を行うとともに、共通理解に努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修内容を工夫するなどしながら引き続き、安全意識を高く持つよう啓発活動を行う。 ・これまでの取組を継続するとともに、感染症対策など状況に応じた対策を講じながら降車外への避難訓練の計画を立て、実施する。 ・児童生徒総会、人権だより、教員対象の研修会などを通して、人権・同和教育の充実を図り、インターネットを通じていじめ防止について理解を深めたい。 ・PTA部委員会、研修委員会の活動の中に救急蘇生研修に加え、防災に関する研修会も開催できるよう関係課等と連携して情報提供を図っていく。 ・引き続き、子ども療育センターと連携し、共通理解を図りながら、安心安全な学校生活が送れるよう努める。

自立と社会参加を見据えた教育活動	交流及び共同学習	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の子どもたちと交流を行う機会を増やし、コミュニケーションをとったり、触れ合ったりすることで、個性や人格を尊重し合いながら、障がいについての相互理解を促す。 ・地域とのつながりを大切にし、手紙やネットワーク等の活用も含め、内容を工夫して計画的に交流する機会を設ける。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・（小学部）地域3校と交流を実施した。学校紹介等の手紙交換交流、感染症対策を施した対面交流（ポッチャ）を実施した。その中で関わりが深まるよう工夫した。 ・（中学部）地域1校とオンライン交流を実施した。クイズ大会など内容を工夫して交流を深めた。 ・（高等部）地域1校とオンライン交流を実施し、学校紹介やポッチャを行った。地域老人クラブ、婦人クラブとは対面で交流を実施し、ポッチャを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・状況に応じた交流の方法を検討し、障がい理解などの啓発に努めるとともに、児童生徒の交流が深められるような活動を工夫する。
	進路指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望調査、個別進路相談を通して、児童生徒のニーズを細やかに把握する。 ・高等部現場実習、個人現場実習を行うことで指導の充実を図る。 ・児童生徒会を中心とした「あいさつ運動」や教職員の挨拶や言葉掛けなどを通して、学校全体のつながりや人との関わりを深める。 ・各部の独自性と一貫性の両面を大切に、将来の生活への見通しを持った指導の充実を図る。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・進路希望調査、個別進路相談の中で、一人一人のニーズや願を細やかに聞き取り、進路指導につなげた。 ・生徒に合った進路先となるよう、外部機関と連携したり、情報収集を行ったりすることで、将来を見据えた実習となるよう努めた。 ・実習の時間だけではなく、他の学習活動においても様々な視点で実習について取り扱い、生徒自身が課題を見出し、その課題に対して行動しようとしたことについての指導、支援を行った。 ・感染症対策のため、あいさつ運動は実施できなかったが児童生生活動の中で、児童生徒会役員を中心に学校全体のつながりや人との関わりを得られるよう工夫した。 ・身近自立や各教科等を通した学習活動においてスモールステップで目標を達成するよう指導や支援に努めた。 ・保護者会において現在、または将来の不安などについての相談先を周知した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての児童生徒に対して進路希望を実施したり、進路相談ができる状況を整えたりするなど、早期からの進路指導、進路に関する情報提供の充実を図る。 ・進路に関する調査や相談を継続的に実施できるよう、適切に設定する。 ・生徒の実態や希望等に応じた実習先の開拓や実習内容の充実を努める。 ・技能検定の位置付けを明確にし、生徒が目標を持ったり達成感を得たりできるよう体制を構築したい。
	幅広い体験的活動の実施 (学校行事・文化・芸術・スポーツ・eスポーツ活動など)	<ul style="list-style-type: none"> ・課外活動におけるeスポーツの実施を通して、生徒が知識や技能を身に付け、生活が豊かになるよう支援する。 ・校内外における体験的な学習活動の機会を大切にするとともに、ICTを活用した学習を積極的に設けて、社会と広く関わる機会を確保するなど学習活動を工夫する。 ・日々の学習をはじめ、学校行事等が充実したものになるよう、各部連携を図り、情報共有や協力体制の構築に努める。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・社会状況に対応しながらの実施ではあるが、遠足や校外学習、修学旅行など校外での体験学習を実施するとともに、それらに準じた出張講座を利用するなどして学習活動の充実を図った。 ・ZoomやDVDレター等を活用して、ふれあい親善大使の活動や地域の学校と交流学習を行った。 ・部活動の一環として、eスポーツに親しむ機会を設けた。活動の中で生徒同士で技術を高め合おうとする様子が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児児童生徒の安全を第一に据えながら、校外での体験学習を計画したり、人間関係が広がるような機会を持つよう工夫したりする。引き続き、オンラインや出張講座なども活用して学習活動の充実を図る。 ・状況に応じた手段を選択しながら、学習の機会を確保し、幅広い体験活動が実施できるよう努める。
	ICT機器等の充実と指導及び活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を活用し、自主的に学ぶ姿勢を培うとともに調べた内容に疑問を持ったり感動したり、学習する喜びを味わいながら学力の向上を図る。 ・一人一台端末等、ICT機器の活用方法についての研修を実施し、実践事例の共有など教員のICT活用能力の向上を図る。 ・一人一台端末等を活用した、リモート行事への参加、個に応じた学習につながるアプリなどの情報集約を積極的に行う。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一台端末を行事や日々の授業などで活用した。様々なアプリや支援機器を組み合わせることで、児童生徒の主体的な学習につながった。 ・授業でタブレット端末やクラウド機能を使うことが増えており、ICT機器の有効性や効果的な活用方法についての情報発信も増えている。 ・行事をリモートで実施する際に、Teams、Zoom、YouTubeなど適切な手段が選択できるよう関係者との情報共有に努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さらにICTを積極的に活用し、学習活動を工夫するとともにそれらを情報共有することで、学習活動の充実を図る。 ・児童生徒のICT機器の活用及び積極的な学習への参加につなげるために、教職員のICT活用のスキルが高まるよう、研修や情報共有の方法を工夫する。

教員の専門性の向上と育成	校内研修の充実及び外部専門家の活用	<ul style="list-style-type: none"> 指導内容研修会で「国語」「算数・数学」「自活主」の各教科等において系統性のある指導が行われているか実態把握のツールの活用や個別の指導計画、年間指導計画の作成における問題点や疑問点、課題等をまとめ、授業改善に取り組む。 外部専門家を活用して、地域の小・中学校等を含む教員の特別支援教育に関する専門性と実践的指導力を高めるための研修を実施する。 自立活動研修会や自立活動課内研修の資料や動画を校内で共有できるようにし、<u>自己研修しやすい環境を整える。研修動画を学年等グループで活用し、教員間で学び合う研修の機会を増やす。</u> キャリア教育推進連絡協議会、技能検定アドバイザー、学校公開セミナーなど外部専門家から知識技能を得たり、学校の取組について助言を受けたりする場を活用する。 外部専門家を活用して、地域の小・中学校等を含む教員の特別支援教育に関する専門性と実践的指導力を高めるための研修を実施する。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 指導内容研修会で実態把握を基にした小グループを編成し、ツールの使い方や授業実践など協議を深め、よりよい授業づくりについて共通理解を図った。 研究授業を基に単元の目標や評価規準について振り返りながら「生活」の目標や内容について細かく見直すことができた。各教科等を合わせた指導における「教科」と「自立活動」の目標や内容の見極めを考えることができた。 ICTレベルアップ研修を4回実施し、内2回を外部に公開した。研修内容を日頃の授業等で生かすことにつなげることができた。 キャリア教育や進路指導に関わる外部専門家や関係者が参加する機会を3回実施し、その中で助言をいただくとともに、情報交換を行い、学習活動の改善につなげた。 技能検定アドバイザー（生徒向けの実技講習会）を2回実施し、検定受験の生徒を中心に専門家の指導を受けることができ、技能習得への意欲を高めることができた。 学習グループごとに自立活動研修を行う機会を設け、日常的に学び合える環境づくりに努めた。また、学校全体では、知識や技能に関わる研修を行い、自立活動に取り組む意識が高まるよう努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ツールを用いた実態把握を学期ごとに実施し、授業実践を振り返ることで目標設定や指導方法、教材教具の工夫など授業改善に取り組みめるよう、機会を設定して働き掛ける。 事後アンケートに基づいて校内外の関心やニーズの把握に努め、研修内容が偏ることなく幅広い専門性を身に付け、深めていけるよう研修を計画する。 ICT活用のレベルアップを図る。特に、クラウド機能やオンラインミーティングの基本的な使用方法について全校での理解を深められるよう工夫する。 外部関係者が学習の様子を参観する機会を捉えて、本校のキャリア教育の課題を洗い出し、取り組めるようにする。 技能検定アドバイザーの積極的に活用する。 引き続き、学習グループでの自立活動研修の機会を確保し、その中でニーズに対応した実践的な実技研修が充実するよう努める。 自立活動に関する知識や技能を幅広く教職員が理解し、身に付けられるよう研修の機会を設けるとともに、情報共有できるようにする。
	教職員の専門性を生かした自主研修会の実施	<ul style="list-style-type: none"> 指導内容研修会の小グループでの課題について各自で教材教具や支援の工夫を考えデータを学校全体で共有し活用する。 指導内容研修会の小グループの取組を全校で共有し、幼児児童生徒の実態把握や教材教具や支援の工夫を各自の取組に反映する。 地域で学ぶ肢体不自由や病虚弱的幼児児童生徒の情報収集と関わる教員のニーズの把握に努めたり、調査・研究のため定例会を継続したりして、教育相談や訪問支援に対応するための実践力を養う。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 指導内容研修会での成果及びデータを共有し、全教職員で活用できるようした。 ICT機器の活用に向けた教職員が個別の活用方法を教授することはあったが、自主研修会の実施には至らなかった。 地域からの教育相談や訪問支援、研修依頼に対応するための調査、研究、事例検討が結果的に自主研修や実践力を付ける機会となった。 特別支援教育コーディネーターの校内定例会を計画していたが、他の業務等との兼ね合いにより、計画していた回数を実施することは難しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 「国語」「算数・数学」以外の教科についても系統性のある指導になるよう、指導内容を話し合う機会を設定したい。 外部専門家を活用した研修と併せて、校内での研修の機会を検討したい。 校内外のニーズに丁寧に対応しながら、特別支援教育コーディネーターを中心とした人的資源を活用し、専門性を生かした自主研修の機会を検討したい。
開かれ	センター的機能の充実	<ul style="list-style-type: none"> 校内外の相談の窓口となり、関係者・関係機関との連絡調整を行いながら、教育相談及び情報提供等を行う。 地域の小・中学校等のニーズの把握に努め、特別支援教育に関するセンターとしての役割を果たすよう教育相談及び研修支援等の充実に努める。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 外部からの相談は年間70件と相談件数はコロナ以前の件数に戻った。校内の支援会議についても計7件の実施となり、昨年度を上回った。 市町の教育相談会に参加し、地域で学ぶ肢体不自由児や病弱虚弱児についての情報を把握した。 センター的機能の訪問支援は6校実施し、半数は継続相談であり、センター的機能について一定の評価を得られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も増加が見込まれる教育相談や訪問支援に対応するための校内体制を整備したい。特に、就学前、また、小学校の医療的ケア児や摂食指導に関する相談に対応する体制づくりに努めたい。 校内に対する相談窓口を周知するとともに、本人や保護者が気軽に相談できるよう工夫をしていく。
	ホームページ等での情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ホームページ掲載の記事を速やかにアップロードし、学習の様子や行事予定等を知らせる。 卒業生の進路状況をホームページに掲載する。年間を通して進路だよりを発行し、キャリアガイド教室の成果や卒業生の様子を伝える。 教育相談や学校公開等をホームページで知らせたり、「特別支援教育だより」を発行したりして、特別支援に関する情報を発信したり研修会を案内したりする。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の「しげ特日記」の更新により、学校行事や授業の様子を発信することができた。 進路だよりを発行するとともに、ホームページに進路状況について掲載した。 地域の学校等へ教育相談会や研修会、教材教具展示会の案内を行った。 特別支援教育だよりの発行や掲示板を活用し、福祉、就労関係の情報について掲載し、周知を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> 肖像権に配慮しながら、学習の様子や学校の取組を随時発信する。 進路だよりにより本人及び保護者のニーズに応じた進路情報などキャリア教育以外の内容を積極的に掲載する。 特別支援教育だより等を活用し、校内教職員や保護者に向けて、個別的教育支援計画の活用事例やセンター的機能の取組について周知する。
	PTA活動の活性化	<ul style="list-style-type: none"> <u>子どもの学校生活に関する要望及び各部の保護者の思いに寄り添い、PTA活動や教育活動が適切に行われるよう、情報交換を密に行っていく。</u> 	C	<ul style="list-style-type: none"> 社会状況により縮小した形ではあるが、各PTA役員が企画運営されている。 保護者集会は情報交換の機会となった。また、保護者からの問合わせに対しては迅速に話し合いの機会を設け、丁寧で正確な回答に努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 状況に応じてPTA活動の方法を工夫しながら、活動が適切に実施されるよう、情報交換を行う。

た 学 校 づ く り	保護者との連携と信頼関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> 日々の情報交換を通して個々の実態把握に努めるとともに、保護者の思いや願いを聞き、連携、協力しながら支援する。 高等部集会、中学部集会、個別進路相談を通して、進路に関する情報提供を行った。保護者の思いを丁寧に聞き取ったりする。 進路実現に向けて日々の関わりを大切に、保護者と連携を図る。 保護者集会や個人懇談、ケース会議において幼児児童生徒の教育的ニーズを把握し、保護者と連携して指導・支援を行う。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 送迎時や連絡帳など非便な情報交換を大切にし、個々の実態把握や保護者との連携、協力を大切に行い、日々の指導支援に生かした。 個人懇談やケース会議、保護者集会を通して、保護者との情報共有や情報交換を行い、教育的ニーズを把握し、日々の指導支援に生かし、信頼関係の構築に努めた。 「しげ特日記」や掲示等を活用して、寄宿舎の様子を積極的に発信した。 寄宿舎送迎時には情報交換を密に行い、丁寧な対応に努めた。 中・高等部の保護者集会では、進路指導や進路情報について周知した。 高等部1・2年生については2学期に進路相談を実施し、保護者本人、学校で今後の進路について話し、情報共有した。 PTA総会や各部保護者集会で学校状況説明や子どもの学校生活に関する要望への回答を行い、学校教育に対しての理解を深めていただくよう努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒や保護者の思いを大切に保護者及び関係機関と十分に情報交換を行い、幼児児童生徒が安心・安全に学校生活が送れるよう努める。 日頃のコミュニケーションを大切にしながら迅速な対応を心掛けるとともに、保護者の意見や要望に真摯に耳を傾け、成長を共に支援する関係づくりに努める。 日常的に保護者とコミュニケーションを図ることで、保護者集会や進路相談において、保護者や本人の思いをくみ取った話し合いができるよう努める。 学校生活全般に対して、保護者の理解・協力が得られるように今年度と同様にPTAと連携を図る。
	学校評議員、学校関係者評価委員会の充実・改善	<ul style="list-style-type: none"> 各課連携し必要な情報の収集に努め、正確な情報をその都度提供する。 自己評価の客観性・透明性を高めるとともに、学校・家庭・地域が学校の現状と課題について共通理解を深めて相互の連携を促す。 学校評価の結果を踏まえ、その改善に取り組むだけでなく、その報告や公表等を行うことによって、学校の全ての関係者と課題を共有する。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 学校の教育活動を参観していただく機会を複数回設けることができ、学校教育に対する御意見、御感想をいただくことができた。 昨年度の学校評価の結果に基づき、具体的改善案を打ち立てて取り組んだ。状況によっては、改善案のとおりの実施が難しい事項もある中で、工夫して学校教育の充実に努め、そのことについて共有できるよう努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会状況に対応しながら、学校教育を知っていただける機会の確保に向けて、実施方法などを工夫する。 学校評価の結果、また、学校評議員、学校関係者評価委員からの助言、提言に基づいて改善を図るとともに、学校教育の充実に向け各課各部連携して、重点目標である「チャレンジし続ける幼児児童生徒の育成」が達成できるよう努める。
業 務 改 善	ICTの活用や業務の見直し等による負担軽減	<ul style="list-style-type: none"> 校務支援システムなど、ICTを効果的に活用して業務の効率化を図る。 業務の内容や執行方法、分担の見直しを行い、業務のスリム化を図る。 目標管理シートを活用して、教職員一人一人が自ら意識して業務改善に取り組む。 勤務状況管理システムによる勤務時間の適正管理や見える化により、全ての教職員が勤務時間に対して意識改革を行う。 夏季休業中に学校閉庁日を設定し、休暇を取得しやすい環境づくりを行う。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 職員朝礼を廃止し、校務支援システムの電子掲示板を活用して連絡事項等を周知し、必要に応じて、各部主事から口頭または紙媒体による連絡を行った。職員会議はオンライン形式で実施し、紙媒体の配付を廃止してペーパーレス化も図った。会議の内容に応じて、①オンライン実施、②書面実施、③書面開催とした。 校務分掌として情報課を設け、ICT活用への対応を図った。教職員の適性を考慮した配置や適切な役割分担に努めた。 目標管理シートや出勤状況記録を活用したり、各部主事からの報告を細やかに聞き取ったりして、管理職の面談や声掛け等を行った。 学校閉庁日を8月12日から16日までの5日間設けることで、休暇を取得しやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒の教育的ニーズに応じたICT機器の効果的な活用指導力の向上を図ることで、教材の共有や授業研究など業務の効率化につなげる。 会議や各種研修、業務における検討及び見直しや、教職員の適性を考慮した配置等を行い、業務のスリム化を進める。 勤務状況管理システムによる勤務時間の把握、職員会議における呼び掛け、管理職による声掛け等を継続する。
	勤務時間の適正管理と意識改革	<ul style="list-style-type: none"> 校務支援システムなど、ICTを効果的に活用して業務の効率化を図る。 業務の内容や執行方法、分担の見直しを行い、業務のスリム化を図る。 目標管理シートを活用して、教職員一人一人が自ら意識して業務改善に取り組む。 勤務状況管理システムによる勤務時間の適正管理や見える化により、全ての教職員が勤務時間に対して意識改革を行う。 夏季休業中に学校閉庁日を設定し、休暇を取得しやすい環境づくりを行う。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 職員朝礼を廃止し、校務支援システムの電子掲示板を活用して連絡事項等を周知し、必要に応じて、各部主事から口頭または紙媒体による連絡を行った。職員会議はオンライン形式で実施し、紙媒体の配付を廃止してペーパーレス化も図った。会議の内容に応じて、①オンライン実施、②書面実施、③書面開催とした。 校務分掌として情報課を設け、ICT活用への対応を図った。教職員の適性を考慮した配置や適切な役割分担に努めた。 目標管理シートや出勤状況記録を活用したり、各部主事からの報告を細やかに聞き取ったりして、管理職の面談や声掛け等を行った。 学校閉庁日を8月12日から16日までの5日間設けることで、休暇を取得しやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒の教育的ニーズに応じたICT機器の効果的な活用指導力の向上を図ることで、教材の共有や授業研究など業務の効率化につなげる。 会議や各種研修、業務における検討及び見直しや、教職員の適性を考慮した配置等を行い、業務のスリム化を進める。 勤務状況管理システムによる勤務時間の把握、職員会議における呼び掛け、管理職による声掛け等を継続する。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。